

小児糖尿病サマーキャンプにおける  
OB・OG の参加のあり方について  
—OB・OG の調査より—

柳沢節子<sup>1)</sup>, 森 哲夫<sup>2)</sup>

**The role of post campers in diabetes camp for children with IDDM**

**— from questionnaires to post campers —**

From the study of questionnaires to post campers who participated in the fourteenth diabetic summer camp for children, the followings were clarified :

- 1) The annual diabetic summer camp is necessary for post campers in that they can communicate interpersonally and confirm the friendship with each other. Especially for the post campers with HbA1c of over 10%, the camp also offers a chance to reflect on their diabetic control.
- 2) The participation of post campers in diabetic camp is helpful to the campers in consulting with experienced ones about their diabetic life.
- 3) All the post campers find that they could contribute the camp with their management skills due to their own past experience.

**Key Words :**

Insulin dependent diabetes mellitus (インスリン依存型糖尿病), Diabetes camp (糖尿病キャンプ), Post camper (OB・OG キャンパー)

はじめに

1963年に、はじめて日本で小児糖尿病サマーキャンプが開かれてから、全国各地でサ

マーキャンプが開催されるようになり<sup>1)</sup>, 国際小児糖尿病キャンプも開催されている<sup>2)</sup>.

インスリン依存型糖尿病 (以下 IDDM) をもつ患児においてサマーキャンプ (以下キャ

1) 信州大学医療技術短期大学部看護学科 ; YANAGISAWA Setsuko, Dept. of Nursing, School of Allied Medical Sciences, Shinshu Univ.

2) 信州大学医学部附属病院 ; MORI Tetsuo, Shinshu Univ. Hospital

ンプとする)に参加して糖尿病の教育・指導を受ける意義は大きい<sup>3)</sup>。それにともないキャンプ経験者である青年期を迎えたIDDM患者(以下OB・OG)がボランティアスタッフとして参加するようになった<sup>4)</sup>。長野県小児糖尿病患者家族会「信州ぶらんこの会」(以下ぶらんこの会)はIDDMの小学生・中学生を対象にキャンプを行い、昭和58年より今年で14回目を終了した。当キャンプにおいても近年OB・OGの参加が増加している。今回OB・OGのキャンプへの参加の意義を明らかにすることを目的に調査を行った。

### 対象及び方法

対象は、第14回信州ぶらんこの会サマーキャンプ(1996年8月3日～8月7日)にOB・OGとして参加した15歳から28歳の15名(男性8名、女性7名)である。

調査方法は、キャンプ終了後、8月20日～9月10日に質問紙を郵送し、自己記入式のアンケート方式で回答を得た。なおサマーキャンプ時に調査について説明し、同意を得た。調査項目は、所属、治療状況、血糖コントロール状況、参加の動機、キャンプでの役割の達成度、キャンパーとの関わり、参加につ

いての満足度、OB・OGが中心となってキャンプを運営することについて、OB・OGが参加することについてである。なお、キャンパーとは、小学生～中学生のサマーキャンプ参加者とする。

信州ぶらんこの会サマーキャンプの概要については次の通りである。ぶらんこの会がキャンプを主催し、①糖尿病の知識を高め、正しい技術を身につける、②集団生活の体験を通して、社会性を身につけ、よりよい人間関係を作る、③自分の事は自分でやり、自分で考え、判断して、行動する、を目標としている。参加の対象は小学生・中学生である。スタッフは、医師・看護婦・栄養士の他に、学生ボランティア(医学部・看護学科・栄養科)、OB・OGなどからなっている。それぞれの役割は、医師・看護婦は医療援助、生活援助を行う。栄養士は食事の準備、栄養指導を行う。学生ボランティアはレクリエーション、キャンパーの生活の面倒をみる。OB・OGは血糖検査・インスリン注射・食事管理を一緒に行い、アドバイスするとともにレクリエーションを行う。学生ボランティアの教育は糖尿病の基礎知識の講義と注射・血糖測定などの技術実習を5月から月2回行った。ス

表1 対象者の概要

ケースNO	性	年齢	所属 職業	発症年齢	罹病期間	HbA1c*	キャンパー 参加回数	OB・OG 参加回数
1	男	15歳	高校生	6歳	9年	6.4%	8	1
2	男	16歳	高校生	4歳	12年	9.5%	9	1
3	男	16歳	高校生	0歳	16年	9.2%	6	1
4	男	16歳	高校生	3歳	13年	8.0%	8	1
5	男	16歳	高校生	11歳	5年	10.6%	6	2
6	女	16歳	高校生	10歳	6年	8.0%	5	2
7	男	19歳	短大生	5歳	13年	10.1%	8	3
8	男	22歳	大学生	3歳	19年	7.4%	2	2
9	女	24歳	会社員	14歳	10年	8.5%	2	1
10	男	25歳	大学生	13歳	12年	6.1%	1	4

\*HbA1cは過去3カ月の平均

表2 キャンプ参加の動機

(件数)

<p><u>自分のため</u>            他のOB・OGとの交流(3)            いろんな話しが聞けるから(1)            多くの人と知り合いになれる(1)            自分の生活態度、コントロールの見直し(1)            自分のプラスになる事があればいいと思った(1)            まだしっかりと知識が身につけていないから(1)</p>
<p><u>キャンパーのため</u>            自分がキャンパーとして教えてもらえなかった何かを教えるため(1)            キャンパーの相談相手(1)</p>
<p><u>その他</u>            なんとなく(2)            恩返しとして(1)            懐かしさ(1)            夏休みの楽しみ(1)            レクリエーションが楽しみ(1)</p>

スタッフの打ち合わせ会は、月2回程度行った。

## 結果

郵送者15名中の回収数は10名(回収率66.7%)であった。

### 1. 対象者の概要(表1)

対象者は、男性8名(80%)、女性2名(20%)であった。年齢は15歳～25歳で、平均18.5±3.6歳であった。職業・所属は高校生6名(60%)、大学生(短大生含む)3名(30%)、社会人1名(10%)であった。発症年齢は0歳～14歳で平均6.9±4.6歳であり、罹病期間は5年～19年で平均11.5±4.0年であった。キャンパーとしての参加回数は1回から9回まで平均5.5回であった。一方OB・OGとしての参加歴は初回から4回であり、平均1.8回であった。インスリン注射の方法は注射器1名、ペン型注射器7名、両者の併用2名であった。1日の注射回数は2回が4名、4回が

6名であった。

OB・OGの平均HbA1cは8.4±1.4%(mean±SD)であり、最近の血糖コントロールの自己評価として、良くなっていると判断したもの、変わらないと判断したものはそれぞれ4名(40%)、悪くなっている、わからないと判断したものそれぞれ1名(10%)であった。

### 2. OB・OGの参加の意義

#### ①参加動機

キャンプへの参加の動機は、自分のため、キャンパーのため、およびその他である(表2)。キャンパーのためという理由は「キャンパーの相談相手になれたらいい」や「自分がキャンパーとして教えてもらえなかった何かを教えてあげたい」であった。自分のためという理由は、「他のOB・OGとの交流」や「生活態度やコントロールの見直しのため」「夏休みの楽しみ」などであった。

## ②役割の達成度について

係りの役割ができたものは2名、できなかったと答えたものは7名、無回答1名であった。役割が達成できた理由は、「与えられた仕事があった」ことであり、達成できなかった理由は「初参加でわからなかった」や「自分の態度の悪さ」などであった。

受け持ちの役割の達成度は果たせたと判断したものの2名、果たせなかったものの7名であった。果たせたと判断した理由は「注射や血糖測定について教えることができた」などであった。果たせなかった理由は、「カウンセラーに任せてしまった」や「キャンパーとの距離のとりかたがわからない」などであった。また、「自分も病気に対する知識がない

ので教えることができなかった」とあげたものもいた(表3)。

## ③キャンパーとの関わりについて

OB・OGとしてキャンパーを受け持ったものは9名であった。受け持ちとしての関わりができたと判断したものの5名、あまり関わらなかったと判断したものの4名であった。関わるることができた理由は、「話すことができた」をあげるものが多く、次いで「教えることができた」であった。関わらなかった理由は「教えることができなかった」や「カウンセラーにまかせてしまった」であった。

受け持ち以外のキャンパーとの関わりについては、関わるることができたと判断したものの6名、できなかったものの3名であった。関わ

表3 役割の達成度について

(件数)

果たせた理由	係りの役割について 与えられた仕事はやった(1) 現在の自分のキャンプでのあり方に満足している(1)
	キャンパー受け持ちの役割について 注射や血糖測定はしっかりとできた(1) 検査・注射の間違いを正しく教えることができた(1)
果たせなかった理由	係りの役割について OB・OGとして初参加でわからない事が多かった(3) 言われなければ行動できなかった(1) 自分の態度が悪かった(2) めんどくさがっていた(1) 忘れてしまってできなかった(1) 糖尿病教室の準備をしっかりとやるべきだった(1)
	キャンパー受け持ちの役割について カウンセラーとOBの違いがよくわからず、キャンパーとの距離がわからなかった(1) カウンセラーが主にやってくれた(1) カウンセラーに任せてしまう気持ちがあった(1) 注射部位や手順など簡単な事は教えられるが、あまり教えることができなかった(1) 血糖測定だけの説明で、食事や普通の生活について相談できなかった(1) 自分でも病気に対する知識がなくて教える事ができなかった(1) 他の仕事が忙しかった(1)

ることができたと判断した理由は、「仲良く遊ぶことができた」や「話し相手として関わられた」であり、関われなかったと判断した理由は、「小さい子が多かったため」など年齢差の違いをあげているものがいた（表4）。

表4 キャンパーとの関わり

(件数)

関 わ れ た 理 由	<u>受け持ちキャンパーとの関わり</u> けっこう話せた(1) 検査・注射だけでなく、日常生活の中でもコミュニケーションがとれた(1) 以前から知っているキャンパーだった(1) 最終日キャンパーから何気なく話しかけてくれた(1) いろいろ教える事ができた(1) 焦点をしぼって教える事ができた(1)
	<u>受け持ち以外のキャンパーとの関わり</u> そこそこできた(1) 仲良く遊ぶ事ができた(1) 遊び相手・普通の話し相手としては関わられた(1) キャンパー全てとコミュニケーションをとることができた(1)
関 わ れ な か っ た 理 由	<u>受け持ちキャンパーとの関わり</u> 消極的だった(1) 教える事がほとんどできなかった(1) カウンセラーが主にやってくれた(1) カウンセラーに任せてしまう気持ちがあった(1)
	<u>受け持ち以外の関わり</u> 消極的だった(1) 小さい子が多かった(1) 自分の知識が足りなかった(1)

表5 今年のサマーキャンプの満足感について

(件数)

満 足 し た 理 由	よいキャンプだった(1) すごく楽しかった(1) 自分が楽しめた (2) OB・OG 同士の交流ができた(1) なにか得られるものがあった(1) 前より糖尿病を知ることができた(1) 自分自身のキャンプでのあり方に満足している(1) 糖尿病教育という面ではまだ改善の余地がある(1)
満 足 で な い 理 由	OB・OG の中で問題が起きたことが残念(1) キャンパーに病気のことについて知ってもらうことができなかった(1) もっと自由にキャンパーと接する時間があってもいい(1)

表6 OB・OGの参加について

(件数)

望ましい理由	<p><u>キャンプにとって望ましい</u>            キャンパーとしての経験があるOB・OGのほうがやってほしくない事を知っている(1)            キャンパーが一番近い人たちなので、キャンパーが喜ぶ企画ができる(3)            キャンパーとして参加したときに感じた課題をもとに企画を組みたいから(1)            キャンパーとして参加しているので、サマーキャンプの改善点を見つけやすい(2)            今までの経験を生かせる(1)            糖尿病教室などでOB・OGの意見が参考になることが多い(1)            OB・OGは現状にもっと意見を出すべき(1)</p>
	<p>キャンパーにとって望ましい            キャンパーの気持ちをよく理解でき得る最適の人たち(1)            キャンパーの気持ちがわかり、うまく接することができる(2)            親や友人に話しづらい糖尿病の日常生活の問題を話す相手として、OB・OGは最適である(1)            自分の体験を語る場になる(1)            OB・OGでなければ教えられることがある(2)            いろいろな人がいて経験の見本なので、機会があったらどんなことでも教えられる(2)            スタッフや学生にもわからない、キャンパー同士の関係が違った目でわかる(1)</p>
	<p><u>OB・OGにとって望ましい</u>            同じ糖尿病をもつ者の交流の場である(1)            年下、年上の年代とのつながりができる(1)            OB・OG自身もキャンプで学ぶことが多い(1)            自分達がひとまわり成長できるような気がする(1)</p>
望ましくない理由	<p>一度も行った事がないので、いきなり行うのは無理がある(1)            OB・OGのみで全てを背負うのは無理がある(1)            自覚のない人はいないほうがいい(1)            目的がないのなら参加する必要はない(1)            OB・OGとして望ましくない人が目につくので、「大学生以上」などの枠を設けたほうがいい(1)            自分も知識がなく、キャンパーよりコントロールも悪いので(1)</p>

## ④参加についての満足度

満足したもの6名、満足しなかったもの3名、無回答1名であった。満足した理由は「楽しかった」、「OB・OG同士の交流ができた」であり、満足できなかった理由は、「キャンパーに病気のことについて知ってもらうことができなかった」などであった(表5)。

## ⑤OB・OGの参加について

来年以降のサマーキャンプに参加したいと希望したものは8名であり、2名はわからないと答えていた。OB・OGがキャンプに参加することについては10名全員が望ましいと答えていた。OB・OGが企画・運営することについては望ましいと答えたものが9名で、望

ましくないと答えたものは1名であった。

参加が望ましいと答えた理由をまとめると次の通りである。「キャンパーとしての経験があるほうがキャンパーが喜ぶ企画ができる」「サマーキャンプの改善点がみつけやすい」「糖尿病教室などで意見が参考となる」「OB・OGでなければ教えられないことがある」などキャンプの運営に役立つことがあげられていた。「キャンパーの気持ちをよく理解できる」などキャンパーの立場を理解できるとした者もあった。また、OB・OG自身もキャンプに参加することは「学ぶことが多い」、「同じ病気をもつものとの交流」「自分達が成長できる」という自分のためになるという意見もあった。望ましくないと答えた理由は、「自覚・目的のない人はいないほうがいい」や、「年齢の枠などの条件を設ける必要性」などであった。「一度も企画運営をしたことがないので、いきなり行うのは無理である」や、「全て背負うことは無理である」など参加の責任の範囲を考えた者もあった(表6)。

#### ⑥OB・OGの役割について

「検査・注射などのサポート」をはじめ、「相談相手になる」など、糖尿病の療養上おこってくる問題や不安を解決するための知識を伝えることをあげていた。また「特に役割を限定せず、何でも必要とされることを行えばよい」という意見もあった(表7)。

表7 OB・OGの役割について

(件数)

検査・注射などのサポート(1)
糖尿病教室(1)
キャンプの企画・運営(1)
キャンパーの見本となる行動を示す(2)
相談相手 (2)
知識を伝える(2)
特に役割は限定しない(1)

## 考察

### 1. OB・OGにとってのサマーキャンプ参加の必要性

兼松は<sup>5)</sup>思春期の小児糖尿病患者は他の年代よりストレスが多く、食事療法や血糖測定・注射などが不規則になりがちとなるなど療養行動が守られにくく、血糖コントロールが乱れやすいと述べている。今回参加したOB・OGは参加の動機について、自分の生活態度、コントロールの見直しのためや、まだしっかりした知識が身につけていないためと答えている。これはキャンプを機会に自分の療養行動を反省しようとする前向きな態度であると推察される。しかし、一方ではまだ知識が十分でないと自覚しており、糖尿病についての継続した教育が必要であると考えられる。

谷田ら<sup>6)</sup>の報告では、サマーキャンプにおける高校生のニーズは第1に、友人との交流であった。今回の調査でもOB・OGが参加して満足だった理由はOB・OG同士の交流であり、同年代との交流を求めていることがわかった。高校生の参加が増えてきたらOB・OGとともにヤングの会を作って活動することの提案も報告されている<sup>7)</sup>。全国では青年期の糖尿病患者を中心にヤングの会が活動しているが、今後、進学、就職、結婚など直面する新たな課題に対応できるように、経験を交流するような会が必要であると考えられる。

参加の理由に楽しみだからや懐かしさからがあり、毎年のキャンプがOB・OGの中でも楽しみとして位置づけられていることがわかった。しかしながらキャンプをキャンパーとしての参加の延長であるかのように、受身的に楽しむだけでなく、スタッフとしての自覚を育てていく必要がある。

OB・OGの血糖コントロールは、HbA1c 10%以上の者が2名であり、自己管理が身についていると思われがちなOB・OGに対してもキャンプなどの機会にコントロールの自覚を促す必要のあることが示唆された。

## 2. キャンパーにとってのOB・OGの参加の必要性について

OB・OGのキャンプ参加の動機は、自分の経験を生かして何かを教えたい、相談相手になりたいなどキャンパーの役に立ちたいという積極的なものがあった。OB・OGは発症年齢平均6.9歳、罹病期間が平均11.5年であり、小学生・中学生時代を糖尿病とともに生活している。したがってIDDM患者がもつ学校生活、家庭生活の悩みを体験、理解していると思われる。受け持ちキャンパーとの関わりは半数ができたとしている。高校生や大学生はキャンパーとも年齢が近い。これはキャンパーの相談相手としては望ましく、OB・OGの参加はキャンパーにとっても意義があると考えられる。OB・OGの参加については10名全員が望ましいと考えている。また、OB・OGでなければ教えられないことがあるという意見もあり、OB・OG本人達自身もその参加に意義を感じていることがうかがわれた。日常生活の工夫や悩みは経験したもののだけが語れることでもあり、OB・OGこそキャンパーの相談相手として重要な存在であると考えられる。相談に答えることによって自分を振り返ることができる。そしてキャンパーの手本となるべく、自分自身の自己管理が意識づけられ、血糖のコントロール状況を再認識する動機づけの場となると考えられる。今後キャンパーへの影響についても検討していく必要がある。

## 3. キャンプにとってのOB・OGの参加の必要性について

参加したOB・OGは高校生が最も多かった。高校生は長期の夏休みがあり、4泊5日というキャンプの日程が確保しやすい。

OB・OGは第10回（2名）から参加しており、以後第11回5名、第12回7名、第13回11名と増加している。

第13回のキャンプにおけるOB・OGの参加は高校生が多かった。役割はレクリエーション係や生活・教育係であったが、その仕事の内容について十分な打ち合わせができなかった。そこで、第14回のキャンプではOB・OGの役割についてスタッフ会で具体的に検討した。その結果キャンパーを受け持ち、注射・血糖測定・食事計算などについてアドバイスしてもらうこととした。

係の役割についてはできたと判断しているものよりできなかったと判断しているもののほうが多かった。その理由は、初参加のため何をすべきかわからなかったり、言われなければ行動できなかったなどであった。このことから、初参加のものに対してさらに十分な打ち合わせが必要であることがわかった。キャンプの準備とスタッフ・ボランティア学生の打ち合わせのため、キャンプ前に1泊2日の勉強会を行ったほか、キャンプ当日まで数回のスタッフ会を行った。多くのOB・OGは学生である。本来の生活の中の部活動や行事があるため、勉強会やスタッフ会に参加できなかった。またOB・OGは県下全域から集まるため、打ち合わせのための集合も地域的に難しい面がある。これも準備のための会への参加が少ない一因と考えられる。しかしながらOB・OGの参加を効果的な参加とするためには役割について十分理解し、自分の役割を自覚しての参加を必要とする。何らかの機



会を設けてOB・OGに教育する必要がある。さらにOB・OGの意見が反映した充実したキャンプづくりが必要である。

来年も参加を希望しているものも多く、今後ますますOB・OGの参加希望が増えることが予想される。自覚のない人はいないほうがいいや、目的がない参加は必要ないという意見もあった。自覚や目的をもったものをどのように判断し、人数制限をするのが課題である。サマーキャンプを開催するにあたり、OB・OGを含めたスタッフの役割・構成について再検討する必要がある。

### まとめ

第14回のサマーキャンプに参加したOB・OGの調査より以下のことが明らかになった。

1. OB・OGにとってのサマーキャンプ参加の必要性では、OB・OG同士の交流ができることであった。また、血糖コントロールがHbA1c 10%の者がおり、自分のコントロールを見直す機会となった。
2. キャンパーにとってのOB・OGの参加の必要性では、相談相手として重要な存在であるなどであった。
3. サマーキャンプにとってのOB・OGの参加は10名全員が望ましいと考えていた。その理由はキャンパーとしての経験を生かして、キャンプを行うことができることなどであった。

### 謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいた皆様に感謝いたします。

### 文献

- 1) 日本糖尿病学会編：子供の糖尿病サマーキャンプのてびき（第2版）。12-16，文光堂，東京，1991。
- 2) 中村慶子，山崎知恵子，三好真寿美：参加者の行動変化からみた国際小児糖尿病キャンプの効果。第25回日本看護学会（小児看護），159-161，1994。
- 3) 丸山博：IDDM児のためのサマーキャンプの役割。小児内科，28（6）：819-822，1996。
- 4) 佐々木望編：小児糖尿病—治療と生活—。147-148，診断と治療社，東京，1995。
- 5) 兼松百合子：思春期糖尿病患者の問題と支援。看護MOOK（16），金原出版，東京，173-181，1985。
- 6) 谷田了子，佐久間寿恵，門脇ミツ子：小児インスリン依存型糖尿病児のサマーキャンプに対するニーズ。第25回日本看護学会（小児看護），162-164，1994。
- 7) 雨宮伸他：小児糖尿病の集団指導。小児科診療，56（8）：1545-1550，1993。

受付日：1996年10月8日

受理日：1996年11月27日